

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 富盛 伸夫



学位申請者 高田三枝子

論文名 日本語語頭閉鎖音の VOT の多様性と通時的変化

【審査結果】

高田三枝子氏から提出された博士学位請求論文「日本語語頭閉鎖音の VOT の多様性と通時的変化」について、2回の論文審査委員会の審議と 2009 年 1 月 29 日に開催された口述による最終試験の結果から、審査委員会は一致して、本論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

なお、審査委員会は、富盛伸夫を主査に、副査として学外から申請者の研究を本学在職中より指導してこられた明海大学教授井上史雄氏、学内から佐藤大和教授、川口裕司教授、中川裕教授の各氏を加えて 5 名で構成された。

【論文の概要と構成】

本研究は日本語諸方言における語頭閉鎖音が持つ音響的特徴 Voice Onset Time（以下、VOT）に見られる多様性に注目し、この VOT 多様性の詳細と関与的要素を体系的に捉えて記述すること、さらにその共時的分布および通時的変化について、社会言語学、言語地理学、および音声学・音韻論的枠組み（概念、論理的枠組み、アプローチおよび理論）によって解釈することを目的としている。

日本語の閉鎖音は、音韻論的にみると有声音 /b, d, g/ と無声音 /p, t, k/ との対立を持ち、またその音響的特徴の一つとして、VOT が関わるものがすでに先行研究で指摘されてきた（Shimizu 1996 など）。またその VOT の特徴として、他の多くの言語に比べ、日本語では有声音で VOT の取る値の範囲が比較的広く、プラスの値をとることもあることが指摘されていた（Homma 1980 など）。しかしこの日本語の VOT に見られる多様性に関与的な要素の分析は、まだなされていなかった。高田氏は、(i) 社会言語学においては音響分析の手法を十分取り入れられていないこと、また (ii) 他方、音声学においては社会言語学的要因に注目することが少ないということ、先行研究の批判から、問題設定とアプローチを明確に規定した。

高田氏は、音声コーパスとして 2 つのおよそ 20 年を隔てた経年資料、すなわち井上史雄氏が大規模調査を行って収録した 1986～89 年の全国高校録音資料と、高田氏が自ら収録に当たった 2006～07 年の指標地域録音資料を用い、音響分析の先端的な手法を用いて VOT を分析し、さら

に、社会言語学的な観点から、日本語の語頭有声閉鎖音の VOT の多様性を考察した。この分析結果に基づき高田氏は、日本語の語頭閉鎖音の VOT に関して以下の点での成果をえて論文の骨格としている。

- (1) 有声閉鎖音の VOT の多様性に関わる地域的要素と世代的要素という 2 つの関与的要素の抽出。
- (2) 有声閉鎖音の VOT に関する地理的分布の詳細な記述。東北と関東以西という地理的変種の認定および東西対立型分布という分布パターンの解釈。
- (3) 有声閉鎖音の世代的分布の記述、およびその変化モデルとして関東以西の半有声音化のロジスティックモデルの提案。
- (4) 有声閉鎖音と無声閉鎖音の VOT 範囲の記述とその関係性の変化の記述。およびマッピングモデルに基づく解釈の提案。
- (5) 有声閉鎖音内の「完全有声音」と「半有声音」という非弁別的な 2 つの音声カテゴリ存在の実証。

これらの知見は、これまで VOT 研究において日本方言学がなし得なかった分析と論点の整理であり、審査委員会は高く評価した。

以下、本論文の構成に従って概要を示す。

本論文の全体は、第一章（序論）から第五章（結論及び残された課題）まで 180 ページがあてられ、引用文献 11 ページ、さらに、参考資料として、分析の基礎資料としてのアンケート内容が 30 ページ添付されている。

第一章では、高田氏は本研究の目的と意義、また研究の背景について簡潔に説明している。1.1 節では本研究の射程と枠組みを説明し、関係する社会言語学、言語地理学、音韻論と本研究との関わりについて述べ、1.2 節では VOT に関する先行研究を紹介し、その批判と残された課題をまとめた。この節は、欧米と日本における社会音声学的研究の経緯と問題点に関する 1.2.1 節と、有声性に関する音響音声学的な研究で明らかにされた事実について述べる 1.2.2 節からなる。

以上の先行研究で残された課題に応じ、1.3 節では本研究の目的に対して 3 つの研究課題を設定した。すなわち、

1. 日本語の語頭有声閉鎖音の VOT の多様性について、共時的分布の記述すること、
 2. その共時的多様性に関わる言語内的・言語外的要因を解明すること、
 3. さらに社会言語学、言語地理学、および音韻論的に解釈し問う現象の位置づけを試みること、
- である。

第二章では研究方法について、本研究で用いる 2 種類の音声コーパスと分析手法について説明している。上記のように「全国高校録音資料」と「指標地域録音資料」は 20 年の経年資料となっており、変化の実時間 (real time) を検証することができる。各資料の収集方法、話者、分析語彙、また分析における利点と限界について確認した後、音響分析方法に関して VOT の測定方

法、統計的手法に関して記述統計法のほか推測統計法の手法について用いるソフト等を含め解説している。

第三章では高田氏は、音響分析の結果を提示した。分析はまず3.1節、3.2節で主に全国高校録音資料を用いて、有声音について共時的な多様性を明らかにした。3.3節では指標地域録音資料を加え、有声音について、通時的な変化について検証した。そして最後に3.4節では無声音のVOTを分析し、有声音と無声音のVOT範囲の関係を検証した。この精緻な音響学的な処理を援用した分析が、日本方言研究における新たな手法といえる。

3.1節では、有声音のVOTに関して5つの要因すなわち子音の調音点、後続母音（言語内的要因）、地域、世代、性別（言語外的（社会言語学的）要因）の分析を行った。その結果、(1) 日本語語頭有声閉鎖音にVOTに関して完全有声音と半有声音という明確な2つの音声カテゴリが存在することを指摘した。また5つの要因の分析の結果、(2) 日本語の語頭有声閉鎖音のVOTの多様性に、地域と世代という社会言語学的要因が他に比べ圧倒的に大きく関わることを明らかにした。

3.2節では地域的要因と世代的要因の組合せの下に、共時的分布の詳細を示した。分析の結果、(1) 古い世代（祖父母世代）では地域差が明確である一方、若い世代ではこれが不明確になること、(2) 古い世代を基本に考えれば、その地理的分布から大きく2つの東北と関東以西という地域的変種、またその中間的な中間地域の変種が認定できること（東北は有声音のVOTがほぼプラスの値の音声、すなわち半有声音に統一される変種であり、逆に関東以西は有声音のVOTはほぼマイナスの音声、すなわち完全有声音に統一される変種、また中間地域はその中間的な音声タイプを示す変種）、(3) 有声音における世代差の結果から、有声音の通時的音声変化が関東以西の変種に起こっていると解釈できることなどを指摘した。

3.3節では、前節までの世代的要因の結果に基づき、語頭有声閉鎖音の音声変化の側面に焦点を当てた分析を行った。まず全国高校録音資料と指標地域録音調査資料を用いて変化の実時間（real time）の検証を行なった。その結果、(1) 基本的に同生年世代同士は似たVOT分布を示し、従って共時的世代差が現在日本語語頭有声閉鎖音に起こっている通時的音声変化の見かけ時間（apparent time）を反映していることを明らかにした。次に、関東以西の音声変化を完全有声音から半有声音へのカテゴリカルな変化として捉えなおし、この変化が、(2) 現在各世代の半有声音化率の上限の上昇という形で進んでおり、また(3) 各世代の平均半有声音化率の変化は一般に社会的現象の普及に観察されるSカーブモデルの前半期の形状に似ることを指摘し、ロジスティックモデルにより、うまく近似できることを確認した。

3.4節では、以上の有声音の結果を受け、有声音と無声音のVOT範囲（VOT range）の関係を、2つの地域で世代ごとに検討した。地域はVOTに関する地域的変種の典型として東北と近畿に絞った。分析の結果、(1) 古い世代では日本語の語頭閉鎖音はVOTに関して有声音・無声音ともに地域差が明確で、どちらにおいても東北の方が相対的に大きい値をとること、また(2) 各地域の古い世代では有声音と無声音のVOT範囲は相対的に区別され、どちらの地域でも無声音相対的に大きい値を取ることで、ただし(3) 若い世代では次第に東北では無声音のVOT範囲が小さい値

の範囲をとるようになり、近畿では逆に有声音の VOT 範囲が大きい値の範囲を取るようになることから、これらの地域差および有声音と無声音の違いが、世代が下るにつれ曖昧になることも示した。

第四章では、第三章で解明された日本語語頭閉鎖音の VOT に関する共時的・通時的分布を、言語地理学、社会言語学、および音韻論の観点から論じた。これにより高田氏は、日本語諸方言の音声特徴を統合的に説明し、かつ、社会音声学へと方法論的な開拓を試みているといえる。

まず 4.1 節では言語地理学的アプローチにより、3.2 節で観察された結果から地理的分布パターンが東西対立型分布 (AB 分布) と解釈できることを指摘した。ただし同時にまだ周囲分布 (ABA 分布) が見出される可能性も同時に指摘した (4.1.1 節)。また東北と関東以西の地理的境界と似た境界を見せる現象のうち、同じく阻害子音の有声性と関わる現象である語中鼻音化と語中有声化との関係について検証した。各現象の分布地域を検証した結果、その地理的分布範囲が語中鼻音化 > 語中有声化 > 語頭半有声音化の順に大きく、後者の観察地域では前者でも観察されるといふ一方向的な包含関係があることを明らかにした。(4.1.2 節)。

4.2 節では地理的変種およびその変化を音韻素性と音声カテゴリのマッピングとして表現することを試みた。この試みでは Keating (1984) の音韻論的枠組みを援用し、そしてその方法を一部拡張することにより、地理的変種間の差異と類似、また音声変化とその連続性が、[±voice] のマッピングする音声カテゴリの違いあるいは同一性によって明確に表現された。4.2.1 節ではまず日本語語頭閉鎖音の音声カテゴリを再度 Keating の提案した音声カテゴリによって再定義し、4.2.2 節では本研究で記述した各地理的変種および世代変種のマッピングを表現した。さらに 4.2.3 節ではこの変化の側面に関して考察を進め、日本語語頭閉鎖音の VOT に関する通時的音声変化の全体像をマッピングにより表現した。またマッピングとして捉えることで解釈される、通時的変化の背景に関していくつかの提案を行なった。すなわち (1) マッピングの切り離しの理由に関して、音響的特徴の弁別機能の弱化あるいは消失の仮説の提案 (4.2.3.1 節)、(2) [+voice] と [-voice] が {v1, unasp.} へマップする理由に関して、Keating (1984) の提案した有標性の仮説との一致の指摘 (4.2.3.2 節)、(3) そして 2 つの音韻素性の 1 つの音声カテゴリへのマッピングにもかかわらず維持される弁別の理由について、他の音声特徴の音韻化の可能性の提案 (4.2.3.3 節) を行なった。

最後に第五章では、以上の研究の成果を要約し (5.1 節)、また反省点を含め今後に残された課題について、(1) 言語地理学的分布パターンのさらなる検証、(2) 通時的音声変化の持続的観察、また (3) VOT 以外の有声音に関わる音声詳細と弁別機能の検証という 3 点を述べている (5.2 節)。

【審査の概要と評価】

論文の審査および口述試験における高田氏の応答から判断し、審査委員によって表明された本論文に対する評価をまとめると、以下の点である。

高く評価された主な点としては、第一に、先行研究で指摘があった日本語諸方言の VOT の多様性について本研究ほど広範囲な音声資料を活用した例はなく、しかも、音響分析とその適切な評

価法にもとづき具体的な根拠を地域と世代のパラメータで明示した点、である。第二に、VOT 分析に基準点を境に二価的解釈から時間軸に連続して配置することにより、多様性の総合的分析と解釈を可能にしている点。第三に、日本語方言音声の研究で、通常意識に上らない音響上の特性に関しても方言的差異のあることを明らかにした点、第四に、20 年ほど前の井上史雄氏による全国資料と独自に収録した重点領域とを比較し、地域と世代の相関において空間的かつ通時的分析を試み動態的側面の独自の解釈へとすすめた点。第五に、分析処理において先行研究を適切に活用しつつ、音声カテゴリによるマッピングなどについて十分な考察がなされている点。最後に、社会音声学という新領域の開拓やこの研究を契機に拓がる新たな研究課題が拓けている点、があげられる。

最終試験（公開審査）では審査委員からは、本論文の質・量ともに抜きん出た日本語方言音声資料の分析と、ここから実証できる共時的・通時的解釈の革新性は十分認めつつも、本研究のめざす社会音声学と従来の音響音声学・音韻論と社会言語学との方法的・研究アプローチ的な整理が明確な形で完結していないこと、被験者の社会グループやレジスタの接触・影響などを考察の範囲に入ればさらに説得力が増すであろうこと、また、一見話者の意識下にある VOT 特徴が言語運用のレベルでは意識化することもある可能性が排除できないこと、分析した素材を用いてさらなる研究が展開するはずであること、などが指摘された。しかし、これらは本研究の到達した結論をいささかも揺るがすものではなく、むしろ、自立した研究者として優れた素質を持ち、大きな期待を表明したことに他ならない。また、高田氏が本研究の遂行には研究助成金を外部団体などより得ており、また、積極的に学会・研究会などで成果を発表してこの論文の完成に至ったことも、審査委員会は評価に加えた。

本論文に対し、審査委員会は課程博士論文として、①論文の問題設定、および扱った主題の専門領域での意義・位置づけに対する的確な認識をもっていること、②先行研究の批判的検討を踏まえた上で視点の独創性を提示していること、③分析の方法・手順とコーパス（データ）処理の適正であること、④論文の体裁、構成、文献の表示、必要な資料の添付などが適切であること、⑤自立した若手研究者としての資質・能力が論文によって確認されていること、などの諸点に照らし、論文審査と最終試験（公開審査）の結果、全員一致して博士（学術）の学位を授与するにふさわしい水準にある研究であるとの結論に達した次第である。